

1. 研究の背景と目的

現代社会において、もはや「地域=コミュニティ」という捉え方に限界が生じてきている。新しいコミュニティの概念として、「テーマコミュニティ」も提唱されてきているⁱ。日常生活の延長として、人と人とを結び、コミュニティ活動の基盤を担うものとしてガーデニングがあげられる。近年のガーデニングブームは一過性のように取られることが多いが、社会やライフスタイルの変化の中で趣味の域を越え、生活に根付きつつある。林らは、ガーデニングにおいてガーデナーはまず内面的な満足感を得た後、街の景観向上や交流など外面的な目的に視点が変動することを明らかにしているⁱⁱ（表1）。

表1 ガーデニングの目的

目的・効果	具体的な内容
内面的目的・効果	心の安らぎのため、生き物を育てる楽しみのため、生活の潤いのため、ストレスの軽減、癒しのため、自然の大切さを知るため
外面的目的・効果	街を美しくしたため、道行く人の心の癒しのため、知人・友人との交流のため、庭やベランダの美化のため
実用的目的・効果	草花や野菜の利用のため、手先の趣味だから、適度な運動になるため、最近やっているから

私的役割を担う庭に公的な役割を求めるためには、ガーデナーの意識特性の把握が必要となる。先に述べた林らは、ガーデナー意識に関する研究において、個人の活動が地域へと広がりを持つためには、個人属性や居住する地域の自治会活動の活発さなどとともに、ガーデニングコンクールや講習会が促進要因の一つであると述べている。

本研究では、ガーデニングコンクールとコンクール応募者の意識特性を主とした。ガーデニングコンクールの特徴およびコンクールに参加するガーデナーの意識特性を明らかにすることにより、ガーデニングコンクールの有効性とあり方について提案することを本研究の目的としている。

2. 研究の方法

(1) 一般ガーデナーの意識特性

コンクール応募用紙の分析に先立ち、既述文献をもとに一般ガーデナーの意識特性を明らかにしたⁱⁱⁱ。これは、一般ガーデナーの意識を把握して、コンクールの一次審査通過者の意識特性との関連性をはかるためにおこなった。

(2) 花かざりコンクールについての調査方法

花かざりコンクールの概要および現状については、文献調査およびコンクール主催者、コンクール入賞ガーデナー、一次審査通過ガーデナーなど11名へのヒアリングから情報を得た。

(3) 一次審査通過者の意識特性についての調査方法

本研究では、分析対象としてコンクール応募用紙の自己PR欄をとりあげる。これらはアンケートやヒアリング調査にみられる誘導質問的性格をやわらげることができ、よりアピールとしての意識を把握できるものであると考える。しかし文字による表現形式を取るため限界が生じることになる。この点に関しては本調査と並行して行ったヒアリング調査の結果を考慮して補う。

(4) 分析方法

応募用紙自己PR欄から記述のカテゴリーに沿って記述を抜き出す。

記述データの単純集計から集団としての傾向をみるタイプ分け

- ・ タイプ分けに用いた変数については庭づくりの動機についてのカテゴリーグループ7つと庭づくりの留意点についてのカテゴリーグループ2つ、計9つのカテゴリーグループを用いた。
- ・ 9つのカテゴリーグループのうち、そのカテゴリー内の記述の合計を全記述数で割ったものをクラスター分析のデータとして用いた。
- ・ クラスター分析により類型化を行った。
- ・ 類型化したグループの性質から名称を決定
- ・ SPSS 10.0J for Windows を使用

属性別傾向の把握

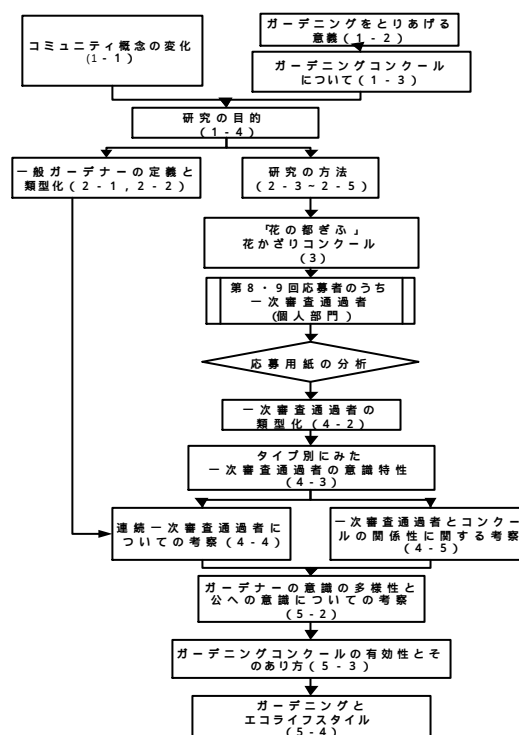


図1 研究のフロー

3. 『花の都ぎふ』花かざりコンクールについて

概要

「花かざりコンクール」は、岐阜県が推奨する「花の都ぎふ」推進活動の一貫として行われており、2000年度で9回目を数えるガーデニングコンクールである。

現状と課題

応募者は毎年増加傾向にあり、ガーデニング技術の向上やコミュニケーション作りとして効果をあげている。一方で、入賞者が過度の見学による精神的な疲れや、ガーデニング技術の向上がもたらしたジレンマが生じている。現在コンクールは方向性を見直しの時期にある。

4. 花かざりコンクール応募用紙にみるガーデナーの意識特性に関する考察

4-1 一次審査通過者の概要

一次審査通過者は、写真による書類審査を通過した集団であり、ガーデニング技術や庭の美しさが優れた集団であると予測される。また、全体のうち80%が女性であり、ガーデニング歴が10～20年のガーデナーが3割を占めていることから、主婦を中心とした集団であり、ガーデニングブーム以前から取り組んでいたガーデニングの「集大成」としてコンクールに応募していると予測できる。その他にも応募の動機はガーデナーによって様々である(図2)。

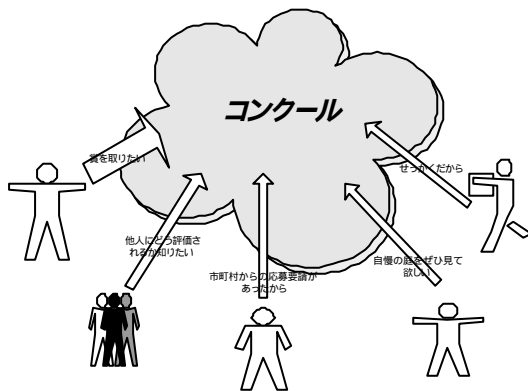


図2 コンクール応募の動機

4-2 タイプ別考察

第8・9回コンクール一次審査通過者計154名のうち、記述不備などで分析対象外とした6名を除き、148名の応募用紙から、ガーデナーを「庭づくりの動機」と「庭づくりにおける留意点」により、以下の6タイプに分類した(表2)。

【サービスタイプ】(14人)

自分のためだけでなく人のために庭づくりをしている集団

【交流タイプ】(24人)

花を通じた交流を楽しみ、花づくりをおこなっている集団

【モノづくり・こだわりタイプ】(44人)

モノを育てる過程に何らかのこだわりを持ち熱心にとりくむ集団

【モノづくり・マイペースタイプ】(13人)

モノを作る過程に熱中し、花づくりを生活の一部としてマイペースで楽しむ集団

【作品づくり・展示タイプ】(10人)

庭や花を一つの作品に見立てるような花づくりを行っている集団

【作品づくり・創作タイプ】(43人)

展示タイプが「美しいもの」そのものに庭づくりの重きを置いているのに対し、美しいものを「作ること」に意義を見出している集団

タイプ	人数	該当クラス	庭づくりの動機	庭づくりの留意点
サービスタイプ	14人	AJS	・道行く人の癒し ・街の景観向上	・景観がやや強、こだわり
交流タイプ	24人	BO	・周囲の反応 ・近所や知らない人との交流	・景観がやや強、こだわり
モノづくりタイプ	こだわりタイプ 44人	CDEF-GHI-P	・育てる喜び ・作るのが楽しいゆとりがある生活	・景観がやや強、こだわり ・モノに強、こだわり
	マイペースタイプ 13人	Q-R-T	・生活の一部 ・趣味とするのが他人事	・こだわりが強い
作品づくりタイプ	展示タイプ 10人	KL	・美しさの追求	・景観に強、こだわり
	創作タイプ 43人	MN	・育てる喜び ・庭を愛しに保つこと	・景観に強、こだわり

表2 一次審査通過者タイプ

4-3-1 庭づくりの動機

「サービスタイプ」「交流タイプ」は街の景観向上や道行く人の癒しなど「マクロ的な視野」を持って庭づくりを行っている集団であるのに対して、「こだわりタイプ」「マイペースタイプ」は「ミクロ的な視野」で庭づくりを楽しんでいるタイプである。また「こだわりタイプ」と「マイペースタイプ」は、モノを作る過程を楽しむ事を動機とする傾向がある「モノづくりタイプ」である。一方、「展示タイプ」と「創作タイプ」は、作品としての庭の美しさに満足度を得る「作品づくりタイプ」のガーデナーの集団である。

4-3-2 庭づくりの留意点

コンクールへの指向性

「展示タイプ」「創作タイプ」とともに景観へのこだわりが他のタイプに比べて強く、景観を審査するコンクールをやや強く意識した集団であるといえる。

環境へ配慮したコメント

ガーデナータイプと環境へ配慮したコメントの記述の有無についてはχ²乗検定により関係性が認められた(図3)。

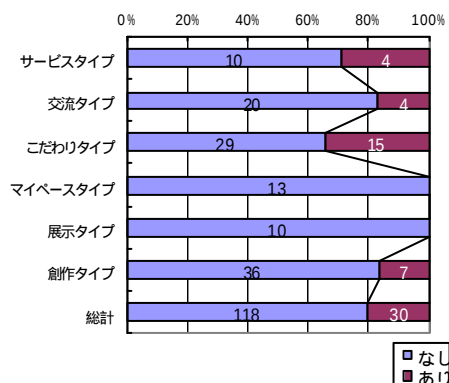
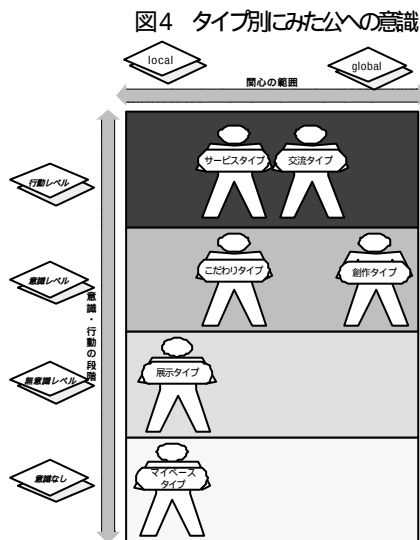


図3 環境へ配慮するコメントの有無

「こだわりタイプ」のガーデナーには積極的に環境問題に取り組む傾向がみられ、また「サービスタイプ」や「交流タイプ」や「創作タイプ」には、土づくりや肥料づくりなど、身近なところで環境に配慮し、積極的な関心や徹底的な行動は半々なが、結果として環境に配慮した庭づくりとなっているガーデナーが存在した。それは環境への指向よりもお金をかけないためという理由が一番の動機であり、環境に配慮することを第一の理由に熱心に取り組む「エコ・ガーデナー」は「こだわりタイプ」に数人しかみられなかった。しかし、ガーデナーにとって、ガーデニングはリサイクルや自然の大切さなど、身近な環境問題を自然に認識できる場であり、楽しみながら環境問題と接していることがわかった。

4-3-3 公への意識

一次審査通過者の庭は、全体的に開かれている開態が多いことがわかった。公への意識の段階と、ガーデナーが認識している公の範囲とをタイプ別にまとめたものが図4である。



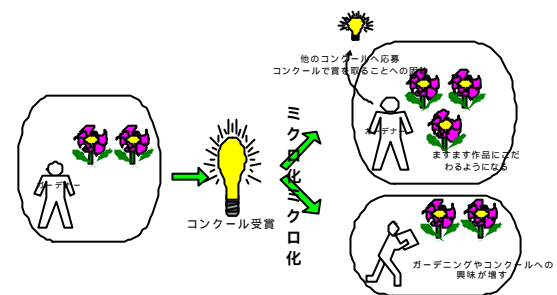
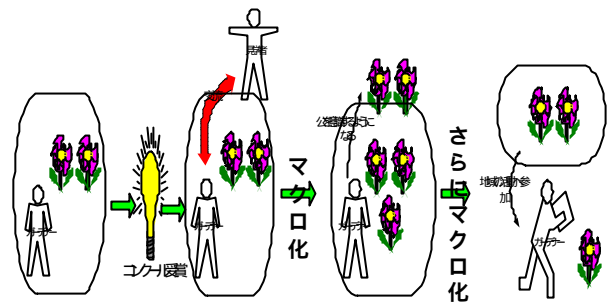
公への意識が高いのは「サービスタイプ」と「交流タイプ」であり、公への意識が一段階行動へと踏み出しつつある段階にある。「サービスタイプ」は花、つばき、のまちづくりなど、やや限られた範囲を意識して行動しているのに対し、「交流タイプ」は不特定の人との交流を望むなど、サービスタイプよりも広い範囲を公として認識していることが推測できた。

また、「こだわりタイプ」と「創作タイプ」の中にも、行動には出ていないものの、公を意識しているガーデナーが存在していた。「創作タイプ」の中には近隣よりもさらに大きな公への広がりを望んでいるガーデナーが含まれていた。

「展示タイプ」は近隣などへの関心はあるが、明確な意識としてはあらわれておらず、「マイペースタイプ」は公への関心に関する記述は全くみられなかった。

コンクール受賞がガーデナーに与える影響

コンクール受賞がガーデナーに与える影響は、大きく次の二つに分けた。まず、コンクール入賞により見学者が増加し、それらの人々との交流などをきっかけにしてサービスタイプや交流タイプとなる「マクロ化」である（図5）。第二に、コンクール受賞が個人の庭づくりの目標となり、それを励みにますますコンクール入賞という目標へ意識が高まったり、自分の庭に対する取り組みがより熱心になる「ミクロ化」である（図6）。しかし「ミクロ化」はガーデナーによっては賞をとることへの執着を強めることにもなる。いずれにせよ、コンクールがなんらかの刺激を与えることが明らかとなった。



5. 結論

ガーデニングの公への展開

ガーデナーの意識の差から、個人がおこなうガーデニングの公への展開について論じる。

庭づくりの動機によるガーデナーのタイプ分けから、ミクロ的視点を持つガーデナーは「育てる喜び」や「庭の美しさから得る喜び」など、「内面的効果」をより重視する傾向にある。また、マクロ的視点を持つガーデナーは「内面的効果」に加え、「街の景観向上」などの「外面的効果」も意識してガーデニングをおこなう傾向にある。「ミクロ的視点タイプ」の中にも、マクロ的な視野を持っているガーデナーは存在しているものの、その多くは意識のみで行動を伴っていない。個人の庭づくりが実践的に公へと展開していくためには、ガーデナーにマクロ的視野を持たせると同時に、意識から行動に移すきっかけづくりが必要であると思われる。

ガーデニングコンクールの限界と地域展開へ

コンクールの開催により競い合うことでガーデニング技術の向上という効果をもたらすが、実際コンクールがガーデナ

ーに及ぶ効果の多くはコンクール「入賞」が与えるものであった。また、コンクール応募者が必ずしもマクロ的な視野を持つガーデナーであるとはいえない。また、入賞者については過度の見学などにより負担をとまなうことも報告されていることから、コンクールがガーデナーの意識に与える効果と同時に、その限界があることを認識しなければならない。

そこで、「マクロ化」がおこる課程(図5)に注目し、今後のコンクールのあり方について検討していく。図5では、入賞に伴い、入賞物件の周辺住民や見学者の反応がガーデナーを励まし、よりマクロ的視点へと向けさせている。この周辺との交流、ガーデナーと地域との密着こそが、今後のコンクールのあり方を検討するうえで大いに重要であると思われる。

ガーデナーと地域との密着を考えた場合、その「密着度」を計るものさしとして、ガーデナーを取り巻く地域住民の反応は大変参考になるとと思われる。そこで、「地域密着型ガーデニングコンクール」を提案する。全国や都道府県など広い範囲でなく、ガーデナーの「顔」が見える市町村単位や地区で開催し、地区住民が投票形式で優秀なガーデナーを選出するなど、より地域に根ざしたコンクールをおこなう必要があるのではないだろうか。また、コンクールに限らず、地域の中の注目ガーデナーを広報誌で紹介したり、ガーデナー同士の交流を目的としたイベントを開催するなど、ガーデナーと地域との接点をつくる「しかけづくり」は、住民参加による花と緑のまちづくりを進めていくうえでも重要である。今後、行政や花と緑の推進センターが、そのような情報の媒介役やイベント主催者として、花のまちづくりの中心的な役割を果たしていくことを一層期待したい。

ガーデニングとライフスタイル

本研究においてガーデニングコンクールとガーデナー意識について調査していく中で、昨今のガーデニングブームやコンクールでは「見かけの美しさ」が人歩きし、庭の「作品化」が起こっていることを強く感じた。庭づくりが庭づくりのみで終わり、生活と切り離される現象が生じつつあるのである。近年のガーデニングブームを、「基本を忘れた花かざり現象」と批判する声もある。しかし、庭やガーデニングは私たちの生活環境を外面的に潤すだけでなく、精神的な世界や生活にも潤いを与えるものでもある。私たちは、もう一度ガーデニング本来の意味をみなおし、ガーデニングとライフスタイルの関係を考える必要があるだろう。

本来の庭が持つ意味

民俗学によれば、「ニワ」とは本来「作業場」という意味を持つというⁱ⁾。しかし、時代とともに、庭の担う役割は変化してきた。ニワは「仕事場」から、花を飾る場所、家を彩る場所として、家の付属物のようになった。「基本を忘れた花かざり現象」といわれる所以も、こういった世間の流れが根底

にあるといえる。

ただ、もちろん、現代のガーデナーの中にも花や庭から美しさから以外から満足感を得ているガーデナーは存在している。本研究では、庭で実用作物を栽培するなど、庭づくりにおいて「モノ」を重視しているガーデナーの存在を明らかにした。彼女たちは、庭に花を植えるばかりでなく、ハーブや野菜を育て、お茶を楽しんだり、食卓で味わうなどの「楽しみ」を見つけていた。また、収穫したものを近所の人と分け合うなど、庭で採れた作物や花苗などの「モノ」がコミュニケーションの媒体としての役割も果たしていることがわかった。それらは昨今の健康志向ブームにおおされ、にわかに流行になりつつある。庭は、少し前まで当たり前のようであった「自然」や「自給生活」と私たちを結びつける接点にもなっている。「ガーデニング」から「ファーム」へと、時代の流れは向きつつあるのかもしれない。

エコ・ライフスタイルへの転換

そして、そういったガーデニングとライフスタイルの関係からは、環境問題解決への糸口も探ることができる。ガーデナーにとって、庭は季節や植物、虫などを通じて自然を身近に感じることでできる場であり、ガーデニングはそのような自然の大切さや偉大さを考える行為ともいえる。ガーデナーへのヒアリング調査や応募用紙においても、「自然の大切さ」や「無駄遣い」、「リサイクル」などという言葉が何度も登場した。ガーデナーの中には、ガーデニングをとおして、生命力や資源の尊さを感じることから「身近な環境問題」に気づき、楽しみながら「エコ・ガーデニング」を実践しているガーデナーが存在しているのである。

ガーデナーの多くは主婦層であり、「地域環境問題なんてむずかしいね。」という人ばかりである。しかし、「好き、楽しい」という気持ちを出発点とし、身近な生活環境と触れ、その過程で少しずつ問題を認識し、そこから、ごみや食へと関心が広がる可能性は大にあると思われる。ガーデニングには「エコ・ライフスタイル」への転換へのヒントが大いに隠れているのである。ガーデニングのような趣味や文化、そしてライフスタイルに根付いた身近な環境問題への一人一人の取り組みこそが、地域環境問題、ひいては地球環境問題解決への一番の近道なのではないだろうか。

ⁱ⁾ 有路信ほか：座談会「コミュニティ・ランドスケープと住まいの緑」,ランドスケープ研究62(1),7-21(1998)

ⁱⁱ⁾ 林まゆみ・塩谷元宏・? 京緑：ガーデニング愛好者にみられる緑豊かなまちづくりへの活動とその促進要因,環境情報科学論文集,14,85-90(2000)

ⁱⁱⁱ⁾ 川根あづさ・愛甲哲也・浅川昭一郎：北海道恵庭市恵み野を事例とした住民の庭づくりに対する意識と取り組みについて,ランドスケープ研究,63(5),695-700(2000)

^{iv)} 現代農業,pp49,社会法人農山漁村文化協会(2000)